

## 五、「一の井出」今昔

国道二〇一号線が、社会教育総合センターの南で金出川を渡るあたりから、JR篠栗線の高架橋の下を眺めると、山地から平地へ流れ出ようとすする金出川の喉首を締め上げているような一つの井堰を見ることが出来ます。

これについて貝原益軒は『筑前国ちくまのくに続風土記つづかぜどき』の中で、次のように記しています。

「金出川の五、六町上に、一の井出という所あり。むかしこの井出を石にてせきがたく、鉄にてせきとめける故、金井出という。」

これを書かれた一七〇〇年頃には、鉄の井出はもう半ば伝説化するほど古い話になっていたことがわかりますが、川底の岩盤に打ち込む鉄といえは鑄鉄ではだめで鍛鉄だったはずですから、そんなに古い鋼材が作られた時代となると、そうやたらに古くさ

かのぼることはできません。

十六世紀の前半、金出村が、中国から進出して高鳥居城（岳城）を拠点に筑前を支配した大内氏の家臣の知行地だったことを示す数通の古文書が残っていることから推測すれば、この井堰を築いたのは戦国期屈指の大名大内氏ではなかったかと思われます。

この井堰の水路は今も、社会教育総合センターの下の山裾を延々とめぐり、金出の扇状地を力強く横断して、高田から遠く津波黒にまで及んでおり、金出村は江戸時代を通じて村位が郡内でも最高の上々村でした。金出村の開発だけでなく、金出川下流の村々の開発の上で、この井堰が果たした役割は絶大であつたと思われます。

篠栗古文書会 黒川 隆志